

第1回千葉市史編纂会議議事録

1 日 時：平成19年5月29日（火） 午後1時30分～3時15分

2 場 所：郷土博物館 講座室

3 出席者：（委員）

吉田会長、野村副会長、本郷委員、安田委員、白井委員

（関係者）

千葉市史編集委員会 三浦委員長

（事務局）

宮野生涯学習部長、本庄生涯学習部参事兼課長、倉田生涯学習振興課主幹、

西郡郷土博物館館長、丸井同館副館長、若菜同館学芸係長、

芦田同館主任主事

4 議 題

（1）平成19年度事業予定について

（2）今後の事業予定について

（3）その他

5 議事の概要

（1）平成19年度事業予定について

事業予定について承認された。

（2）今後の事業予定について

主に「歴史読本」の企画について意見を出し合い、引き続き検討していくこととなった。

（3）その他

委員の任期について説明し、了解を得た。

6 会議経過

午後1時30分、委員5名中5名着席。全員出席。

司会（若菜係長）より、配付資料についての説明があり、続いて西郡館長より、設置要綱第5条第2項の規定により、この会議が成立していることが告げられ開会。

宮野生涯学習部長の挨拶に続いて、本庄参事兼課長が職員の紹介を行ってから議事に入った。

議題1 平成19年度事業予定について

平成19年度の市史編纂関係の事業予定について、史料調査収集・整理事業、市史等の刊行事業、編纂普及事業、市史研究事業の4つに分けて担当より報告をおこなった。

その中で、同時に配付した「旧軍施設関係、開拓団関係収集資料一覧」と「平成18年

度講座の参加状況及びアンケート結果報告」についてもあわせて説明した。

< 質疑応答 >

吉田会長：史料調査収集との関係で質問だが、この博物館の地下に収蔵庫があると思うが、そのスペースの様子と収集されたそれらの貴重な史料は、整理終了後に外部からの閲覧希望があると思うが、それらが現状ではどうなっているか教えてほしい。

事務局（芦田）：収蔵庫に関しては以前先生方にも見ていただいたと思うがほぼ満杯の状態が変わっていない。むしろその後も史料が増え続けている。収集に関しては史料が散逸しては困るという意識で行っているので、地域に関係した史料の寄託・寄贈の打診があれば積極的に受けて入れている。確かに収蔵スペースとの関係でジレンマはある。閲覧については、調査研究に関する希望にはできるかぎり対応している。文書館のように常時開いているという状況ではないが、こちらの対応できる日に合わせて閲覧してもらっている。

吉田会長：大堀家文書は寄託なのか。

事務局（芦田）：大堀家文書については、まだ整理中なので、整理後に寄託にするかどうかの相談をする予定である。従って、現状では閲覧の対象にはなっていない。目録が完成し整理が終了した段階で寄託していただけるようであれば閲覧の対象となる。

吉田会長：満杯なのに調査が継続しているのが不思議な感じがする。改善の余地や見通しはないのか。

事務局（芦田）：現状では収蔵スペースを他のどこかに確保できるという見通しはない。しかしこのままという訳にもいかないで、全てを収蔵庫の中に入れるのではなく、耐えられるものについては他の施設に置くなど分散して収蔵することも今後検討していきたいと思っている。

吉田会長：この点ではあまり進展が見られないということだね。

野村副会長：いま収蔵庫がいっぱいでこんな質問もどうかと思うが、個人の出版物や社史等の収集は市の図書館などで行われているのか。国会図書館には作成すれば寄贈することがある程度義務づけられているが、こうした個人の出版物や社史等もいずれ貴重な資料となっていくと思うので、これらの収集についてはどのように考えているか。

事務局（芦田）：個人の出版物等について100パーセント把握することは難しいが、新聞などに出たもので特に市内に関係するものであればできるだけ連絡をして購入させてもらったり、寄贈してもらったりして収集している。企業の社史などについても出た段階で情報があればできるだけ寄贈してもらったり購入させてもらうということはこれまでも行ってきている。これについては継続していきたいと考えている。ただ、どうしても洩れが出てしまう点は不十分だと感じている。

野村副会長：市政だよりなどで寄贈してもらえるように呼びかけることも必要ではないかと思う。

吉田会長：そこで大量に寄贈したいという方がいたら置く場所に困るのではないか。

野村副会長：確かにそうしたことでは困るのだが、こうした面では他の市立図書館などとうまく連携すればできるのではないかな。

事務局（宮野部長）：市民の方からの寄贈・寄託について、そろそろ郷土博物館だけでは限界になってきている部分があることは否めない。中央図書館には情報資料課というセクションがあるので、地区館単位で市民の方々に寄贈・寄託を呼びかけたり、千葉市全体に関わるものは中央図書館でというようにちょうど取り組みをはじめたところである。ご意見を参考にさせていただきながら中央図書館と郷土博物館の役割分担を考えながら取り組んでいきたいと思っている。

吉田会長：聞き取り調査を少しずつはじめているが、その記録はどこにストックしているのか。例えばこの千葉大学とで行った聞き取り調査の記録についての閲覧とか、聞き取りの録音を聴きたいなどの希望者への対応はどのようにするのか。これは古文書などとはまた別の情報管理の問題だと思うがその点は現状ではどうしているのか。

事務局（芦田）：聞き取りの情報とか録音したものについての閲覧希望はいまのところない。確かに今後出てくる可能性があるのでもうどうしていくかを今後考えていかなければいけないと思っている。千葉大学との共同事業は博物館で行ったが、館で実施した聞き取りのデータと市史で行ったものが同様の扱いになるように相談して対応を決めていきたいと思っている。

野村副会長：今回配っていただいた千葉大学との共同事業の聞き取り調査の報告書はちょっと読んでみると面白いのだが、これはどこで見られるのか。

事務局（丸井副館長）：これは千葉大学の方で報告書として作っていただいたもので、市内の小中学校や図書館には今後配付する予定である。また、先ほどご質問があった聞き取り調査の記録については、今後千葉大学と博物館で整理した上で閲覧できるように検討している。

野村副会長：せっかく大学生が協力してくれたので、代表的ないい話だけでもインターネットに掲載できればよいと思う。

吉田会長：これは音声の記録とこのメモというかデータの的なものが残っているということか。例えば音声を文字に起こしてそれをもっと読みやすくするといったことまでは至っていないということか。

事務局（丸井副館長）：聞き取りをしたときの内容は要旨としてここに掲載している。実際に聞き取った音声についてはデジタルで保存しているので、調査研究目的であれば今後希望者には聴けるような形を考えている。

野村副会長：せっかくいいものを作ったので有効に活用してもらいたいと思う。

吉田会長：『千葉いまむかし』についてはどうか。以前に表紙も含めてリニューアルを提案したのが、却下されたようだがそうした余地はもうないのか。これは市史の普及に関する重要な内容だと思うが、我々がこれにどこまで関われるのか。例えば投稿原稿が現在1本だというのが、何時が切なのか。また、投稿原稿をもっと増やす工夫などもあると思うが、それはどのレベルで行われているのか。

事務局（芦田）：まだ未確定であったために今回の20号では更新できなかったが、もしこの場でご提案をいただければ次回の編集委員会に提案し、21号に反映で

きると考える。投稿原稿については問い合わせが1件あったということで、まだ投稿はされていない。また、これについて積極的にアピールをしているかについては、『千葉いまむかし』の後ろに投稿規定を掲載しているに止まっている。場合によっては市史研究講座などでチラシを配って呼びかけることもできるのではないかと考える。なお、原稿の〆切は8月30日としている。

吉田会長：刊行はいつか。

事務局（芦田）：刊行は3月31日だが、投稿原稿の〆切はその年度の8月30日にさせてもらっている。

白井委員：千葉大との共同事業の聞き取り調査報告書は図書館や小中学校に配られるというが、一般市民の立場からすると図書館にいて報告書を目にして初めて知ることになる。こうしたものが発行されたというような情報を市政だよりやホームページに掲載するなど一般市民に広めることは考えないのか。

事務局（芦田）：現在のところ『千葉いまむかし』などの刊行物については博物館のホームページでPRをしているが、研究紀要や個別報告書については行っていない。今後そうした情報も掲載できるかどうか検討していきたいと思う。市政だよりについてはこれまで掲載したことがなかったが、今後必要があれば広報課に依頼してみたい。

事務局（宮野部長）：今、市政だよりについての説明があったが、市政だよりは広報課の所管だが、市政記者会も広報課の所管なので、今後こうした成果について市政記者会の方へ投げ込みなどが可能なのかも含めて協議していきたい。

吉田会長：この冊子には、発行は千葉大学となっているが、どこに連絡すれば分けてもらえるとか購入できるとか、実際にこの冊子を作ったのが誰なのかとかの基本的なデータが載っていないが。

本郷委員：聞き取りがどのような条件で行われたのかという問題もある。あくまで研究目的なのか、それとも皆さんに広く知らせていいものなのかそれによっても扱いが違ってくる。

事務局（宮野部長）：もともとの前提はそうしたことを想定していなかったと思う。従って、ただいま頂戴したご意見のように外向けに発信していくとなると当然そういった問い合わせがあると思うので、そうした問い合わせにも耐えられるように今後作業してまいりたいと思う。

吉田会長：誰向けの報告書なのか。

事務局（丸井副館長）：これは共同研究を行うに際して「千葉市近現代史の聞き取り調査会」というものを作り、千葉大学と郷土博物館内にそれぞれ事務局を置いて調査を行った。具体的にはこの報告書というのはその成果を千葉市に報告した内容となる。郷土博物館としては市内の小中学校や図書館などに配付できるくらいの分については大学側からいただいたという性格のものである。

事務局（宮野部長）：これから市史の近現代に取り組んでいくわけなので、こうした調査報告も活用が図られないとあまり意味がないのではないかと、委員さんの意見を伺っていて自分なりに理解したところである。この報告書は18年度だが、今度どれくらいの割合でこうした調査報告が出せるかはわからないが、活用が図

られ、また、継続ができるような形で考えたい。やはりこうした成果は活かしていかないとつらいので、情報も発信していけるように検討していきたいと思う。

白井委員：これを見ているとちょうど60代、70代の市史研究講座などに出てくる方々に非常に興味のある内容だと思ったので、そうした方々にも見られるような形が望ましい。

吉田会長：これは議題2とも関係する内容だと思う。他に講座関係などではどうか。このアンケートをチラッと見た範囲でももっと開けとか、お金を取ってもいいからもっと開けという要望が多いような気がするが、あまりそれに対応する予定になっていないような気がする。例えば市史研究講座にも現代史を入れたらどうか。

事務局（芦田）：できれば入れたいが講師の候補がない。千葉市に関係した現代史を研究している方がほとんどいないというのが現状なので、今後近現代の編集委員の先生方に史料調査を進めてもらい、千葉市の近現代を素材に研究を進めてもらえるようになればこうした講座の講師にもどんどんお願いできると考えている。そうすれば市史研究講座の近代・現代の部分をもう少し充実できると考えている。

吉田会長：この報告書にある千葉大の田村先生や大学院生の長谷川さんなどはすぐにでも講師ができるのではないか。

事務局（丸井副館長）：当時大学院生だった長谷川さん、あるいは市史編集委員の小林先生などはこれだけの調査を行っているのでお話しはできるかと思うが、まだそうしたことは想定していなかった。

吉田会長：私がいうのも変だが、少し近世偏重ではないかと思う。古文書の勉強会も近世史だと思うので、これから近現代史を編纂していくことともからめて現代史にもっと重点を置いたらどうかと思う。

では時間もあるので、色々注文はあるが、概略としては了解したということで、次に議題2に移る。

議題2 今後の事業予定について

今後の事業予定について、計画している刊行物とその他の活動についての概要を説明した上で、「歴史読本」について前回各委員から提案された内容を踏まえて作成した事務局のたたき台についてその内容を担当より説明した。

< 質疑応答 >

吉田会長：このたたき台の案は1～2年の間に4冊出そうということか。

事務局（芦田）：できるだけ集中して出したいという希望がある。

野村副会長：21年か22年の間に全部作りたいということか。それとも1～2年で集中的に作業をした上でそれから刊行ということか。

事務局（芦田）：刊行も含めて1～2年の間にと考えている。

本郷委員：つまり4冊並行して作業を進めるということか。

事務局（芦田）：たたき台としてはそう考えている。

野村副会長：4冊構成というのがひっかかる。アンケートにもあるが、移住してきて

千葉市に住む人が多くなって、通史的な千葉市の歴史を知りたいという要求が非常に強くなっているということはわかる。この案では原始古代・中世・近世・近現代の全4冊構成で、全体としては480～640頁になる。できれば200～300ページくらいの読み物にならないか。確かに遺跡遺物や史料、写真などを丁寧に解説するというのはわかるが、これだとかかなり膨大なものになる可能性がある。そうしたものはコラム的に挿入してはどうか。作る上では4冊構成が易しいのか。

吉田会長：予算的な問題を含めて無理ではないか。これまでの計画にプラスして刊行経費を要望することになるわけだろう。

安田委員：私はここのところ出席できなかったのですが、このようなものを考えているということを知らなかったが、市内の主要な歴史的事項や遺跡・遺物、史跡・史料などの解説を主軸に組み立てるといふ、この組み立て方は非常によいと思う。やはり千葉市域の歴史ということなのだから実際に市域を歩いて回れるというか、この読本を持ちながら実際に現場を訪ねて歩けるという形の作り方をするのが一番よいのではないかという気がする。その点でいえば、このたたき台は全4冊構成の原始・古代、中世、近世、近現代といった時間の流れで追うという発想がまだ強く残っていると思う。それよりも歴史読本なのだから本をもって市域の現場に行くという、そうしたことで使えるということをもっと全面に出してしまっただ方が読まれる本になると思う。私が市民だったらむしろそうしたものが欲しいというか参考にしたいという気がする。

吉田会長：どういった市民かにもよる。いま安田委員がおっしゃったような考えでいけばむしろ地域ブロック別の編集構成になる。

安田委員：そこまではやらなくてよいが、現場を訪ねるそのガイドブックに使えるような本になればよい。

吉田会長：いわゆるよくある『歴史散歩』といったようなものか。

白井委員：実際に史跡を歩く歴史散歩に関しても市政だよりに出るとその日の内に定員になってしまうという話を聞いている。やはり市民の中でそういった関心が高いと感じている。だからそういった本があれば例え抽選に洩れても自分でそこに行くことが可能となる。だいが前に紙で一枚一枚になっていて解説したものが市のどこかにあったように記憶しているが、それについても千葉市内はどんどん開発が進んで変わっていると思うので、そうしたものをもう一度全部調べ直して刊行するというのも市民にとってはよいと思う。

吉田会長：そうとうこのたたき台と違うようだが。

事務局（宮野部長）：本日はたたき台なので、いただいたご意見は参考にしてまた見直しをさせていただくということになるが、私なりに前回持ったイメージは今日お手元に中学生用の副読本の「伸びゆく千葉市」をお配りしているが、このようなもので、もう少し大人向けの記載をした本と考えていた。ご心配いただいたように、本当に千葉市は19～21年と厳しい財政状況が続くので、そうした中で一番実現性の高い物を追った方がよいと考えている。確かに4冊だと持ち運びもたいへんだし、ある時代のみを持って行ってもやはり歴史は継続性・連続性が

あることなので、関係する他の時代を見たいが置いてきてしまったということにもなりかねない。そうなっても困るので、ご指摘を踏まえてまた検討させてもらいたい。

吉田会長：この副読本はよくできている。これでいいのではないかという気すらする。

野村副会長：確かにこういったものがあればというくらいよくできている。

吉田会長：むしろこうしたものを一般市民の方にも普及するような努力をしたほうがよいのではないか。

事務局（宮野部長）：たしかに、装丁などを少し変えればこのままできそうな気がする。

野村副会長：4分冊だと4,000円かかる。払う方もたいへんである。

白井委員：実を言うとこの副読本は中学校ではあまり使っている時間がない。だから一応作りはしたものの、授業時間数が少ない中ではなかなか授業で使えないという現状がある。だから本年度はこれをホームページ化してインターネットでも見られるようにしようということを教育センターで行っている。どうしても中学生には最初から活字では難しいので、それを視覚に訴えれば多少は見るかと考えて始めているところである。

吉田会長：これだったら市民の方々への講演のテキストに十分なる。

本郷委員：しかし中学生の家庭では、こうした事に関心をもつ年齢層からは外れてしまう。

野村副会長：文庫本よりも少し大きめの判で作ったらかなりのボリュームがあるものができる。とにかく市民の関心が得られるものを是非作って欲しいと思う。

吉田会長：千葉市のわかりやすい通史的なものはこれを大きく越えるものは作れないと思う。あるいはこれを改訂することに協力するとか、むしろ千葉市史でやる特徴を持たせるためには、先ほど安田委員がいわれたような歴史散歩的なものか、私が前にいったのは、千葉市図誌の実質的なダイジェスト版で、あれは分厚くて重いので、図誌に掲載している絵図や地図をたくさんこの編纂室で持っているわけだから、それを素材として20項目くらいに絞って、その絵図とか古文書の解説を加えてハンディな本を作るのがよいのではないか。それが一番労力がかからないし、見栄えもすると思う。事務局の案はよいと思うがこれだと80項目になる。私も経験があるが、一つの項目を書くとなると結構たいへんである。論文まではいかなくてもそれなりの労力が必要なので80人組織するわけにはいかないから、1人が数項目ずつとなると絶対原稿の早い人遅い人が出てきてスムーズにいかない。それを統括というか進行の管理は市史担当がやるのか。それはすごくたいへんなことである。

事務局（宮野部長）：よく行政の文書でどのような方を対象にどの程度のレベルの表現をするかが議論になる場合がある。その場合にはだいたい中学3年生くらいに合わせるような文章がわかりやすいとされている。そういった意味からするとこの中学生向けの資料はちょうどいいのかなと思う。今日はじめて見たが、このくらいの文章であれば結構頭に残りやすい。

吉田会長：これはやはり中学校の先生方の力量の高さだ。すごいと思う。これを越え

るものではない。

事務局（宮野部長）：今のご意見を参考にさせてもらい、再度ご提案したい。

野村副会長：歴史読本については参考資料の文章の中で、「なぜ今必要なのか」という部分はよいと思うし、「誰を対象とした本にするのか」という部分についても私は了解である。「どんな体裁でどんな特徴を持った本か」の部分で少し変えていただいて、ここで出た色々な意見を参考にしてもらいたい。個人的には4分冊というのには疑問がある。このあたりをできたらもう一回検討してもらえるとありがたい。それから各1,000円ではなくて1,000円以内で全部見られるくらいにしないと新住民もなかなか買ってくれないのではないかと思う。

事務局（宮野部長）：消費税を入れて1,000円以内くらいだと買いやすいと思う。

吉田会長：それから編集作業も含めて一般の出版社との連携がこういった事業の場合には可能ではないかと思う。地元の出版社に事実上編集を請け負ってもらってその中から市が何千部かを買い取るとか、そこだけ少し刷りを変えとかしてもよい。これは作業を合理化するという意味もあるし、逆にそうしないと担当者に全部仕事が集まることになる。それを避けるということと、あと財政的な市の負担を少しでも避けるという点でこうした工夫ができるのではないかと思う。

事務局（宮野部長）：先ほどより実現性が高いということを申し上げたが、そういった意味ではこの『伸びゆく千葉市』を装丁を変えて、例えば前後の編集の部分も一般市民向けの内容を書き加えながら、教育委員会の横の連携を図りつつこれを有償化するということになれば、今、市では広告料収入を上げるようにという市の方針もあるので、こういった方向が実現性が高いのかということの検討もしていきたい。

野村副会長：予算要求としては来年とか再来年とかになるのか。

事務局（宮野部長）：一番早ければ来年度だが、本日いただいたご意見を踏まえていくともう少し具体的に詰めなければいけないので、それまでにもう一度編纂会議を開ければよいが、時間の関係もあるので場合によっては21年度ということになるかもしれない。ただ、事前の政策会議などに提案しておいて方針さえ決めておけばと考える。

野村副会長：予算要求も8月になれば査定が始まる。

白井委員：この副読本を作ったとき、当初は歴史だけということだった。それは中学生に郷土の歴史を教える必要があるからということで、歴史の副読本をとということだった。しかしそれでは片手落ちになるだろうということで地理と公民が入ったのだが、地理と公民については数字などが何年かで変わってくるのでその部分を改訂していく作業がたいへんである。

吉田会長：今日の話伺っていて、歴史散歩的なものも面白いと思うが、先ほど出ていたオーラルの話も面白いのではないかと思う。こうした聞き取り成果の中から何人かの方々の記録を中心に編集し、戦中戦後の千葉を語るというようなハンディな本を作る。それを市民の方々が見れば自分はどうだったのかという反応が引き出せるのではないか。それから、先ほど言ったような図誌を再編集したようなものと2冊くらいならばできるのではないか。

野村副会長：市制施行までを一冊にして、それ以降は別冊にしてもよいのかもしれない。現代まで入れるとかなりボリュームがあるように感じる。

吉田会長：これからどうやって進めていくかだが、次回が1月となるとすぐ忘れてしまうので、そこで思い出しながら議論して、また決まらなくて、結局また来年ということになりかねない。ここにあるプロジェクトチームというのを立ち上げてはどうか。そこでもっと実現可能なたたき台を作り直して、必要であれば秋にでも編纂会議を招集してはどうか。もし来年度ということであればもう少し前倒ししなければならないかもしれないが。

野村副会長：5か年の中では来年度予算化するようなことにはなっていないかった。だからなかなか予算は付かないのではないかという気がする。

事務局（宮野部長）：確かに野村委員さんのおっしゃるように厳しい状況ではある。しかしなぜ今必要なのかというこの部分を内部向けに詰めていきたい。ちょうど5か年計画の見直しが今年度あるのだが、その見直しも拡大の見直しというのはちょっと考えにくい。ただそうした中でもこういった必要なものは提案していきたいと思っている。最終的に所管局がどのような判断をするかわからないが、出さないことには何もできない。だから希望的なことを申し上げると、5か年の見直しにまず提案をし、その成り行きを見て20年度の要望がもし厳しければ取り下げ、翌年21年度以降の要望に備えて、只今のご提案をじっくりと検討して、内容、それから編集体制などについて詰めていくことを考えている。市史編纂については市長からもだいたい時間がかかるようだねという話があった。これは予算をつけていただけないのでやむを得ずそういった状況になっているわけなのだが、一方では市長の方からもこうした成果品を求められているという部分もあるので、とにかく提案をしていきたいと思っている。

野村副会長：編纂会議で予算の心配までしなくてもいいのだろうが。

吉田会長：今回事務局の方でたたき台をまとめていただいたが、これを踏まえての具体案を作るプロジェクトチームを立ち上げてはどうか。そこで秋までに1・2回会議を行ってもらって、その内容を編纂会議宛に報告してもらい、それをベースとして次回の編纂会議である程度の方向性を決めたい。いきなりここで流してまた次回ということになると決まらない気がするのでそれでよいか。

野村副会長：私はよいと思う。

吉田会長：まだしばらく時間があるが、今の点あるいは歴史読本の内容も含めて今後の事業予定についてご意見をいただければと思う。

野村副会長：市史協力員の養成だが、古文書整理実習を修了した方たちがボランティアのような形で協力してもらいたいということはこの会議で提言した内容だが、可能性としてはかなりあるのか。

事務局（芦田）：今回10名ということで募集をしている。その内半分くらいの方が残ってもらえればと考えている。これは実際にやってみなければわからないので次回に報告させていただきたい。

野村副会長：デジタル化とも関連するが、できるだけパソコンを駆使できる若い方が入ってもらえればありがたいと思う。史料のデジタル化などの分野でうまく使え

ばお金をかけないでかなりデジタル化ができる可能性がある。

事務局（宮野部長）：実は埋蔵文化財調査センターでデジタル化を進めている。ただ内部で利用しているだけなので、これに先ほど説明したように加曽利貝塚博物館、郷土博物館を加えた3館で、それぞれが情報を共有できるようにしていきたい。そして究極的には市民に開放できる部分についてはホームページなどでアクセスできるような形を目指して参りたいと考えている。先ほど野村先生がおっしゃったようにお金をかけないでできる方法もいくらでもある。現に埋蔵文化財調査センターではお金をかけずに実際にそういうことに取り組んでいる。

吉田会長：埋蔵文化財センターではどういったものをデジタル化しているのか。

事務局（宮野部長）：発掘した埋蔵文化財が中心になっているが、それは対象が違うだけで史料でもシステム的には同じことである。センターではデジタル写真でデータベース化を図っている。あとは相互の連携をとれる部分の予算を取ればと思っている。場合によってはそのまま直接アクセスする方法もあると思う。今は学校からもアクセスできない状況なので、学校の授業の中で資料として使いたくても活用できない状況にある。

吉田会長：ただ文書のデジタル化というのはかなりお金がかかるのではないか。

本郷委員：撮影する手間代などがかかる。

吉田会長：史料はマイクロ化してからデジタルで呼び込むのか。

本郷委員：古いものでマイクロしかないものはしかたがないが、最近はいきなりデジタルで撮影している。ただし、デジタルというのはいまだ信用がおけないというか、出張にデジタルカメラを持っていくことには抵抗がある。きちんとできるかどうかという面もあって、まだマイクロの方が使っている。ただ所内の写真室で撮るのはデジタルになってきている。

事務局（宮野部長）：郷土博物館の史料のほとんどがマイクロ化されているのか。

事務局（芦田）：まだほとんどとはいえないが、マイクロ化は継続してやっている。

吉田会長：ここにある史料のデジタル化というのはマイクロ化してあるものやこれから撮影するもののデジタル化ということか。

事務局（芦田）：そうです。市史ではマイクロ化されたものからデジタル化するにはお金がかかり難しいので、当方に預かっている史料をデジタルカメラで撮影して保存することを進めている。

吉田会長：目録類はどうなのか。

事務局（芦田）：手書きの目録に関しては現在PDFにすることを進めている。それも将来的には入力せざるを得ないのかなとは思っている。

吉田会長：最近のものは入力しているのか。

事務局（芦田）：最近整理したものは入力しているが、古い目録が膨大にある。

野村副会長：デジタル化は索引を作るのがたいへんで、ただ取り込めばいいというわけではない。目次を作るのがたいへんなのである。新聞などは縮刷版でほとんど全部をデジタルにしているが、見出しを検索できるようなかなり精度の高いソフトができてきているという。ただ新聞と古文書では違うとは思いますが。

本郷委員：見出しをいちいち付けていかなければいけないのがたいへんである。しか

しそれがなければ表題だけ見て通覧していかなければならなくなる。

吉田会長：研究会等についてはどうか。議題1にある市史研究会と同じ事か。

事務局（芦田）：同じ事である。こちらは将来的な活動ということで回数が異なっている。

吉田会長：以上で議題2を終了するが、先ほど申し上げた歴史読本のまとめ方についてはよろしく願いたい。それでは次に議題3に移る。

議題3 その他

事務局より連絡として委員の任期についての説明と、新任期の委嘱に際して委員を増員する方向で検討していることを説明した。

吉田会長：他に先生方から何かあれば。なければこれで議事を終了する。

問い合わせ先 千葉市立郷土博物館市史編纂担当

TEL 043 - 222 - 8231